

道徳学習指導案

1年1組 吉松 智昭

1. 主題名 正しいことを行う勇氣（1－③）

2. 研究主題との関連

考え続ける道徳の授業づくり

～身体や経験を通して、正しいことを判断し、勇氣をもって取り組んで生活をするについて考え、
学びを表現し、さらによりよい自分を目指そうと考える場の構成～

(1) 主題について

本主題は、「よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。」という低学年1－（3）「勇氣・善悪の区別」の価値をねらうものである。人としてやってよいことと、社会通念として、してはならないことをしっかり区別したり、判断したりする力は、低学年のこの時期から徹底して身につけていくべきものである。また、そこから描かれたよりよい自分を自己実現していくために、何事にも正しいことを積極的に取り組む姿勢が必要であり、その原動力が勇氣である。

本主題は人として正しいこととは何かを判断の中心におき、よいこと、正しいことだと思ったことは進んで実行することをねらいとしている。自分が客観的な立場にいるときは、比較的正しい判断ができているが、当事者となり問題場面に遭遇すると、自分の都合のよい考えで判断してしまうこともある。人としてよいこと、正しいこととは何かよく考え、行ってよいこととしてはならないことを区別する力を養うとともに、正しいと思ったことは、進んで行う態度を養いたい。

児童に道徳アンケートをとったところ、生活の中でしてはいけないことをしたことがあると答えた児童は35人中33人であった。主な内容は、「廊下を走ってしまった。」「信号無視をした。」というようなルールを破ること、「いたづらをした。」「悪口を言った。」「無視をした。」というような相手に対して悪い行為のことが多かった。そのような行動をとってしまった理由を聞くと、前者は、「急いでいたから。」「習い事に遅れそうだったから。」などがあり、後者は、「おもしろかったから。」「怒っていたから。」「他のことをしていたから。」などがあった。ここから、多くの児童はしてはいけないとわかっていながらも、自分の都合に合わせて正しくない行為を行っていることが分かった。

学級でも同様な姿が見られている。入学当初から学んできた学校のルールやマナーを守らなければいけないと理解しており、毎月の生活目標について話し合う学年朝会では、どのように生活していけばよいかをしっかりと考え、生活目標に見合った意見が多くあがる。しかし、実際の学校生活では、廊下を走っていたり、登下校中に遊んでしまったりする姿も見られる。してはいけないことだとわかっているにもかかわらず、楽しくてついしてしまったり、みんながやっていることだから自分もいだろうという考えからふさわしくない行動をとってしまったりする。正しいことを行うことは、何も損をしていないということを感じ、進んで正しいことを行うことは気持ちがよいことを感じ取らせたい。

本資料「にんじんばたけ」は、遊んでいた三びきのうさぎたちが、にんじんでいっぱい畑を見つけることから始まる。あまりにおいしそうなので畑に入ろうとすると「はたけにはいるな。」と書いた立て札を見つけ、畑に入ることを躊躇した。しかし、その畑で、にんじんの食べかすを見つけたうさぎのしるちゃんの「みんなもたべているのだから、ぼくたちだけたべないなんてそんだよね。」という言葉に心

が揺れるうさぎたち。しかし、ぴよんちゃんの「そうかなあ。」という言葉で、さらにうさぎたちの心は揺れる。最後は、にんじんを食べないことを決めたくさぎたちの元気な姿が野原に見られたという内容である。

立て札を見て一度は正しい行動を取ろうとしたにもかかわらず、にんじんの食べかすを見つけて、食べないと損だという言葉に心が揺れるところに共感させる。そして、「食べちゃいけないんだよね。」という言葉から、役割演技を通して、食べなくてもどうして損にならないのかをしっかりと考え、さらに、正しいことを行う気持ちよさを感得させたい。

(2) 学びを創り続ける授業の構成

○学びを表現する場の設定

①書く活動から学びを表現する

身体感覚や話し合い活動などの学び合いの場から考えた自分の意見を書く活動を通して、自分を振り返る場は、学びを表現している場と考える。さらに、自分の思考の変容や新たな気づきを捉えやすくすることで、学びを実感し、道徳的実践意欲と態度に結びつくと考える。

授業後のワークシートを見るだけで、自分の思考の流れが振り返れるようなワークシートの工夫をする。「食べちゃいけないんだよね。」と言った場面では、簡単に書けるワークシートを用意する。自分一人で考えたことと、話し合い後の考えを書けるように枠を二つ用意する。一人で考えたこと、全体で話し合った後の考えたこと、それぞれ色を変えて記入させる。黒鉛筆、赤鉛筆の順で記入することで、視覚的にも思考の流れが読み取りやすい。また、このように中心発問での書く活動を繰り返すことで、子どもたちは、最初に考えたことは「黒」、全体で話し合った後の考えは「赤」というイメージはもつようになる。全体での話し合い活動後に、またさらに自分の考えを書くこと意識することで、より積極的に友だちの考えと自分の考えの相違点や新たな視点に着目して、話し合い活動に取り組むことができる。自分の考えだけで終わることなく、友だちとの話し合い活動を重ねていく中で、さらによりよい生き方や考え方はないかと考え続けるようにする。

②動作化・役割演技から学びを表現する

おいしそうなにんじんを見つけた場面や顔を見合わせている場面では、実際に「しろちゃん」の表情や言動を動作化しながら、その人物の心情に共感させる。

「食べちゃいけないんだよね。」と言った場面では、「しろちゃん」役を児童が演じ、教師が顔を見合わせた「うさちゃん」役を演じて意図的な発問をすることで、本時の道徳的価値のよさを言語化させる。

③終末から学びを表現する

終末では、導入を振り返り、自分の生活を振り返ることで、本時のねらいとする道徳的価値に結びつけたい。アンケートは、全員が実施しているので、導入に振り返ることで、それぞれの生活経験が想起されやすい。実際に自分たちの生活と結びつけることで実践力につなげたい。

3. 本時のねらい

してはいけないことはやめておこうとするしろちゃんの心情を考えることを通して、勇気をもって正しいことを行っていこうとする態度を養う。